

氏 名 渡辺 和之

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 152 号

学位授与の日付 平成 18 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 東ネパールにおける羊飼いの生産活動と放牧地をめぐる  
社会関係

論文審査委員 主 査 教授 佐々木 史郎  
教授 岸上 伸啓  
助教授 南 真木人  
教授 石井 溥（東京外国語大学）

## 論文内容の要旨

本論文の目的は、東ネパールの羊飼いを対象とし、その牧畜における生産活動と放牧地をめぐる社会関係を人類学的に考察することである。特に市場経済や国家政策による影響がある中で、彼らがいかに家畜を使用し、どのように対内的・対外的な社会関係を調整して放牧するかを明らかにする。

第1章ではヒマラヤ地域の牧畜に関する先行研究を検討した。同地域における牧畜は産地の高度差利用や共有地管理に関心がもたれてきた。しかし、そのほとんどは訳や交配牛を対象としたもので、羊や山羊の牧畜は高地から低地まで及ぶににもかかわらず、その技術や畜産物の生産活動はほとんど調査されてこなかった。また、インドのヒマラヤ地域では市場経済の浸透や森林政策の、羊や山羊を放牧地に対する影響が研究されていたのに対して、ネパールでは移動先でいかに放牧地を確保するのかという点について、ほとんど調べられてこなかった。

調査は東ネパールのサガルマータ県において、1994年から1998年にかけて計4回行った。のべ2年半のネパール滞在のうち、13ヶ月を牧畜の調査、8ヶ月を村の調査にあてた。

第2章では、対象地域の地理的概況・羊飼いの母村・羊の移動形態について述べた。羊飼いの母村であるルムジャタール村は標高1300mで、中間山地帯に位置する。この村の羊飼いは、高山草地から低地まで移動する。その間の高度差は4000m以上で、片道200km近くにも及ぶ。ただし、この村の羊飼いの場合には、他村と異なり冬に平原地帯近くまで行かずに、村にとどまるものがある。冬にある程度の低地にさえ下ればよいので、必ずしも長距離移動は必要不可欠ではない。

第3章では、家畜飼養の技術と畜産物の生産に至る過程を記述・分析した。羊飼いは名称によって羊の個体識別をしており、朝夕の頭数確認に用いる。また、子羊に母羊の乳をすべて与えてしまうというのも特徴の一つで、乳を搾るのは仔がいなくなった雌からである。彼らは雌の仔羊は群れの再生産に使うが、雄の仔羊は離乳が可能担った段階で、冬の放牧地の農民に売る。さらに、老齢や事故で「歩けない羊」も仲買人に肉として売る。また、雌の羊も取引されることがあるが、それは社会関係に左右されることがある。

第4章では、移動と放牧をめぐる羊飼いどうしの社会関係を、放牧キャンプの社会構成、主人＝牧夫関係、放牧テリトリーをめぐる社会関係から分析した。放牧キャンプの構成員は特定の出身村・民族集団・カーストには限定されておらず、親族関係、姻族関係、友人関係などによっている。また、家畜頭数が多い場合には羊100頭につき1名の牧夫を雇うことがあり、そのときには主人と牧夫の関係が生じるが、それも流動的である。同様に、放牧テリトリーをめぐる社会関係も流動的で、特定のテリトリーの利用権所有者が決まっている高山草地の夏の放牧地の場合でも、所有者の共同放牧者となれば権利を直接持っていなくても利用できる。

第5章では羊飼いが移動する先でいかに放牧地を確保するのか、移動する先の住民との関係、国家との関係を述べた。夏の放牧地はシェルパの共有林であるため、羊飼いたちはシェルパに放牧料を支払い、家畜儀礼をシェルパと共同で行い、シェルパの畑に施肥するなど、シェルパとの社会関係を維持しながら放牧地を利用する。冬の放牧地は国有林であるため、行政村に放牧料を支払って利用する。羊飼いと放牧先の住民との関係は国の森林

政策の導入で変化しつつある。例えば、住民側が森林利用者組織（サムダイ）を結成して、放牧地を細分化し、新たに放牧料を要求するようになっており、それに対して羊飼いたちも、放牧料を値切ったり、拒否したりなど新たな対応に追われるようになった。

第6章では市場経済の影響が著しい現在の彼らの村において、羊飼いたちにはどのような選択肢があるかを考察した。村の就職状況を検討した結果、多くの職業選択の幅が見られた。羊飼いは幼少の頃からずっと羊飼いであったわけではなく、グルァ兵や出稼ぎなど、彼らの選択肢の幅も大きかった。また、出稼ぎに失敗した人でも、羊を飼うことで得た現金で土地や家を買うことができた。つまり、動産としての羊を不動産に転換することで、現代においても羊を飼うことには経済的な意味があるのである。

第7章では結論として、以下のようなことを述べた。すなわち、東ネパールの羊の牧畜は畜産物を通じて市場経済に組み込まれているが、その取引は市場だけでなく、取引相手に選択肢があり、社会関係も介在していること、放牧地の地用は排他的なものではなく、テリトリーや共有林を持たなくても社会関係によっては放牧でき、国会政策の変化にも交渉で対応していること、そして、市場経済や国家政策の影響を受けていても、彼らは周囲の社会関係を利用して柔軟に牧畜を続けていることを指摘した。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は、東ネパールの羊飼いの牧畜活動を、文化生態学的方法を基礎に、政治経済学と社会史の視点を織り交ぜながら、分析したものである。ヒマラヤ地域の牧畜活動では高地に強いヤクの飼育に関する文化生態学的研究がよく知られているが、その反面グルンなどが行っている羊の牧畜活動についてはあまり注目されてこなかった。しかも、ヒマラヤのような高地では高度差を利用した移牧に着目した生態学的な研究が中心で、牧畜民社会の外との政治経済的な関係や、時代状況による社会変化まで視野に入れた研究はほとんどなかった。その意味で、本論文は先駆的な意味を持つ。

論文は以下のような構成で書かれている。

まず第1章では「序論」として、この論文の目的と意義、先行研究のレビュー、分析方法、そして構成が述べられる。続く第2章と第3章は基本的な情報の提示で、第2章では調査地の概略が紹介され、第3章では羊飼育の技術的な側面が紹介される。

第4章、第5章、第6章は本論文の中核をなす章である。第4章では、羊を飼う牧畜民内部の社会関係が、第5章ではシェルパなど高地でヤクの牧畜と農耕を行う集団、あるいは低地で農業を営む集団など外部社会との関係が論じられる。そして第6章では前の2つの章で論じられた社会関係とその変化の中で、羊を飼う牧畜民たちがいかに牧畜という生活手段を選択しているのかが論じられる。

この3つの章の中で重要な点は、羊を飼う牧畜民たちは、放牧形態、放牧地の使用、繁殖に関わらない雄の子羊の処分、牧畜活動で生産される羊毛の販売などに関して、農民のような牧畜民社会外の人々と密接なつながりを持ち、彼らの牧畜活動も、内部の社会関係も、この外部社会との関係の変化に大きく左右されているということである。例えば、羊飼いたちは4000メートル近くに及ぶ高度差を利用しながら季節移動を行うが、それは単に生態学的な理由によるだけでなく、低地農民への羊毛や雄の子羊の販売、あるいは高地にいるシェルパとの放牧地を巡る契約関係や儀礼などの要因が大きく関わっている。そして、国家の森林政策の変化に伴い、その関係のあり方も姿を変えている。文化生態学的な説明が主流だった高度差を利用した牧畜や移牧の分析に、政治経済学や社会史の視点を導入してこのような点を明らかにしたことは、本論文の重要な成果であったといえるだろう。

しかし他方で、審査委員たちから厳しい指摘も見られた。例えば、シェルパとの互酬的な依存状況は、F.バルトのニッチ論を批判的に発展させるための格好の材料となった可能性があったにもかかわらず、有効に利用されていなかった点、同じネパールの中でも、西部の牧畜民の状況との比較が不十分だった点、そして、羊の牧畜生態、あるいは牧畜民の社会関係を論ずる上で欠かせないモンゴルや中央アジア、西アジア、アフリカの牧畜民たちに関する先行研究の分析が十分ではなかった点などである。

しかし、4000メートルにも及ぶ高度差をもものともせず現地住民とともに移動しながら調査を行い、事実上研究の空白部分であった東ネパールの羊の牧畜民の活動状況を、文化生態学的視点と政治経済学的視点から分析して明らかにした点は高く評価できる。したがって、審査委員会は本論文を学位に値するものと判断するものである。